

ハンガリー・カーロリガシュパール大学訪問報告

鈴木修一

訪問先：KÁROLI GÁSPÁR UNIVERSITY OF THE HUNGARIAN
REFORMED CHURCH
Department of Japanese Studies

訪問日時：2006年11月7日（火）

訪問者：鈴木修一

数日前の夜遅くハンガリー国際空港に着いたときは、吹雪まじりの小さな嵐のような天気、真冬を思わせる寒さだったが、大学を訪れたときは、それが嘘のような小春日和の暖かさだった。本学同僚の富谷先生に紹介していただき、カーロリ・ガシュパール大学日本学科の学科長ヴァッローク・イローナ先生にお会いして話を聞かせていただいた。大学はその住所（Reviczky u 4/c）を頼りに（前もって宿泊していたホテルのカウンターでおおよその場所を聞いておいたので）すぐ辿り着くことが出来た。なんとホテルから歩いて15分ほどのところに在った。校舎に入ってその三階に階段を登ると、一見雑居ビルの如き様相で、一瞬とまどったが、近くにいた女学生に尋ねると親切にも部屋まで案内してくれた。E-mailで予め連絡をとって約束していた時間より10分位前に着いたのだが、先生は既に待っていてくださり、念のためと、日本人の講師伊東先生も同席して下さった。しかし全くそんな心配がいらないう位、失礼な言い方になるが、先生の日本語は流暢で語彙も豊かで日本語の表現にも習熟されていて申し分なかった。以下うかがった要点をいただいた学科案内をも参照しつつ記す。

1. 学科の歴史

大学の設立は1885年に創立されたブタペスト改革派神学アカデミーに由来して1900年に大学となったが、この報告書の標題に記したようにプロテスタント系の宗教大学（1）である。

そして1994年に日本語の予備コースが設立され、大学の人文学部日本学科は1995年に創立された。設立の趣旨は、ハンガリー企業の日本進出、日本企業のハンガリー進出に対応するための日本語教師養成と日本社会の研究にあるということである。しかしそれにしてもブタペストには日本の東大にあたる総合大学にも日本学科があるので、少々疑問があったので、失礼にも、かつてのツラニズム（2）とは関係がないかと質問したら、「うちの理事長がツラニズムに関心をもっているので、幾分関係があるかもしれない」とのことであった。

2. 学生

日本学科の学生数は平均して毎年30人位で、その2/3以上が卒業していくとのこと、修学年限は従来5年だったが2006年度から3年になったとのこと、そして大学院の修士課程2年がある。卒業生は日本企業に就職したり、大学、高校の日本語教師になったりするが、もちろん、それだけでは就職が100%確保されるわけではないので、ダブル専攻制度をとっていて、他学部他学科の学生と同じように就職することも多いとのことである。

3. カリキュラム等

日本学科のカリキュラムとして挙げられるのは、現代日本語、日本語言語学、日本文化入門を初めとして、日本研究購読、古典日本語、漢文、日本文学史、日本史、日本宗教史、日本社会論、日本と世界、日本外交政策、日本美術史、中国文明論等々と非常に多岐にわたっている。そのためにも先ず日本語の習得が大切なので、日本語を未習で入って来る学生には、日本語の Preparatory course が設けられており、さらに Intensive course (週に15時間) によって、speaking, reading, writing, listening という四つのスキルの訓練を徹底的にうけることである。

このように教育の主眼は、先に触れた設立趣旨の目的を果たすために、実践的言語知識、日本社会、経済、政治、国際関係の学習に置かれているとのこと。また、そのために、大阪外語大学と最長一年を限度とする交換留学生制度が2003年秋から始まったとのこと。

4. 学科スタッフ等

学科長は、会見に応じてくださったヴァッローク・イローナ先生 Ilona Varrók CMs, (3) さんで、専門は現代日本文学、日本教育史。お尋ねしたら、日本文学史の講義では、奈良時代から現代までの通史をなさっているとのこと、その博覧強記には驚かされた。以下専門の分野に触れながら挙げる。敬称は略させていただく。日本美術史の Éva Cseh (非常勤)、現代日本史の Dr. Ildikó Fakas、日本社会論、日本国際関係論の Attila Gergely (政治、経済等の講義も行っているとのこと)、比較文学、辞書学の István Jano、古典語、古典文学の Zoltán Máté、日本宗教史の Dr. Péter Nemeshegyi (非常勤) 現代中国史、中国・ハンガリー関係論、中国キリスト教布教論の Dr. Péter Vámos、現代日本文学、俳句の DR. Jndit Vihar、そして日本人の Seiji Wakai と会見に同席してくださった伊東先生等である。以上カリキュラムとスタッフを一覧すれば、不十分な点は多々あるとしても、それなりに充実していると言っても過言ではないであろうとおもわれる。

5. その他

先生方の所属する研究室は写真でみていただくとわかるように長方形のかなり大きな部屋が二つあって、個別の研究室ではないようである。その壁の両側にびっしり日本語の本が配架されていて、冊数をお尋ねしたら、約1000冊位とのことのお答えだった。予算がとほしいので主に国際交流基金などの援助によって購入されているとの由。

スタッフとしては上記の他に、日本人の客員教授による講義・ゼミナール等も行われることがあるとのこと。

そして、現在、かつての辞書が古くなったので、新しい標準ハンガリー語・日本語事典(見出し30,000誌)の編集を2000年に始めて、2004年春に完成予定だったが、今も継続中とのこと。

イローナ先生との会見を終えた後、伊東先生に校舎を案内していただき、最後に図書館を見学したいと言って連れていかれた所が、学生の図書館のような部屋で、そこを一覧させていただいたが、残念ながら、アジア関係の英語・ハンガリー語の本が少数あるだけで、少々がっかりした。

イローナ先生、伊東先生に、そして紹介いただいた富谷先生に、この稿を終るに当たって感謝のことはをのべさせていただきます。ありがとうございました。

(1) ホテルの人に大学の場所を尋ねたとき、宗教大学と言っていた。地元ではそう呼んでいるらしい。

(2) ツラニズムとはツランと称されるウラル・アルタイ系語族を民族統合しようとする運動。

日露戦争で勝利した日本に関心をもち、日本をアジアにおけるツラニズムの代表と見なすようになったが、運動は第二次大戦後は消えてしまった。

(3) ハンガリー語での発音が残念ながらわからないので、お名前を間違えたらいけないので原語のまま

記す。イローナ先生の場合は交換した名詞にカタカナでそう記してあった。

